The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

| | |
|---|---|
| Title | 初期中英語の従属節における接続詞þatの有無について |
| Author(s) | 大津, 智彦 |
| Citation | 大阪大学英米研究. 2008, 32, p. 37-54 |
| Version Type | VoR |
| URL | https://hdl.handle.net/11094/99321 |
| rights | |
| Note | |

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

# 初期中英語の従属節における接続詞 *þat* の有無について*

大 津 智 彦

## 1 導　入

筆者はOtsu（2002b）において、*cweþan*、*secgan*、*geþencan*、*witan* など伝達や認知に関わる動詞が導く古英語の従属節について、接続詞 *þæt*の有無の調査と間接話法の発達に関する考察を行った。その際、例文（1a）～（1e）にあるように、特に従属節が *gif* 節を含む場合に焦点を置き調査したが、それは従属節が複雑化することによって、単純な従属節からは窺うことのできない事実が明らかになると考えたからである。

(1) (a) Se hælend cwæð. Gif ge forgyfað þam mannum þe wið eow agyltað þonne forgyfð eow eower heofenlica fæder eowere synna.

(ÆCHom I 3 203, 135-6)

"The Saviour said, 'If you forgive those who do wrong to you, God will forgive you your sins.'"

(b) Ac ðæm unbealdum is to kyðanne, gif hie be ænegum dæle wolden geðencean hwæt hie selfe wæren, ðonne ne leten hie no hie eallinga on ælce healfe gebigean, ne furðum no awecggan. (CP 42.306.2)

"The irresolute are to be told, if they considered at all what they themselves were, they would not at all let themselves be inclined on every side, nor even be moved."

(b)' I said if he didn't call him today and volunteer this information, I'd do it. (*Under the Beetle's Cellar*)

(c) Forðæm he wenð, gif he hit ær geseo, ðæt he hit wille forsaca.

(CP 26.187.10)

"For he thinks, if he see it beforehand, that he will refuse it."

(d) Cwæt hwæþer, ... þæt gif hi mid hine þæt geþafian woldan, þæt hi ealle ætsomne on lifes willan Criste gehalgade wæran.

(Bede 2, 10.134.3)

"Yet he said, ... that if they agreed with him, that all together would be consecrated to Christ in the fount of life."

(d)' So you might say that the night you met up with him at the shopping center, that at that particular time he indicated that he'd changed his mind. (*Breakheart Hill*)

(e) And ure ælc mæg be woruldlican þingan eac georne gecnawan þæt gyf hwa hæfð his hlaforde sare abolgen, ne bið him na gebeorhlic þæt he in him ætforan ga ær he gebete. (WHom 15, 58)

"And each of us may also surely know from secular examples that if someone has sorely irritated his master, it is not fitting that he appear in his presence before he makes amends."

同論文では調査結果に基づき次の３点の主張をした。

ｉ）古英語においては、*gif*節を含む従属節が接続詞*þæt*を欠く場合（いわゆるゼロ形）が非常に多いが、これは構造の類似性から見て、ゼロ形の起源が直接話法にあるからである。

ii）従属節に*þæt*が現れる場合においても直接話法の影響を反映しており、構造上、ゼロ形に近いものがある。

iii）このような現象は、古英語においては書き言葉が未発達であり、話し言

葉の特徴を保持していたため、複雑な従属節を処理しきれずに起きたものである。

ところで、古英語において口語的な特徴を保持するゼロ形や *þæt* を含む従属節（*þæt* 形）とはどういうものなのか、初期中英語の議論をする際に比較対象として明らかにしておく必要があるので、まず古英語のほうから具体例を見ていくことにする。

まず (1a)（＝タイプ*a*）は直接話法の例であるが、間接話法との比較のため、最初に検討しておく。古英語には引用符はないが、時制の一致や人称代名詞の変化がないことから、(1a) が直接話法の文であることがわかる。これが引用部分に *gif* 節を含む直接話法の古英語における典型例である。

次の (1b)（＝タイプ*b*）の文は接続詞 *þæt* を伴わない（ゼロ形の）間接話法とみなした。一見 (1a) とほとんど変わりがないが、従属節において３人称複数の *hie* は主節の *ðæm unbealdum* を指し、人称の一致を示している。また、このタイプでは、主節の動詞に *cyþan*、*geþencan*、*ongietan* などの認知を意味する動詞がくるのがポイントとなる。というのは、これらの動詞が *gif* 節などを持たない単文の従属節を導く場合を見てみると、常に *þæt* 形を取るのである。よってこれらの動詞は通常間接話法を導くものと考えられる。しかし、従属節が *gif* 節を伴う場合、(1b) のようにしばしば *þæt* を伴わないゼロ形で現れるのである。これは、構文が複雑化するため、接続詞 *þæt* が *gif* 節およびその帰結節を従属節内に収めらないで、元は直接話法であったものが、人称の変化、時制の一致のみで間接話法に再分析 (reanalysis) されたためと思われるのである。従属節部の語順が (1a) の直接話法の文と同じになっている点にご注目されたい。なお、このタイプは (1b)' にあるように、れっきとした間接話法として現代英語に引き継がれている。

古英語においては書き言葉が未発達であったため、複雑な従属節を接続詞 *þæt* が率いる節内に収めることが困難であった様子は次の (1c)（＝タイプ*c*）にも窺うことができる。この文では接続詞 *þæt* が用いられていることに加

えて、人称の一致もあり間接話法と言えるが、*þæt* 節内に収められているのは帰結節のみで、*gif* 節は主節動詞の直後で接続詞 *þæt* の左側、すなわち直接話法で占めているのと同じ位置に置かれている。

さらに次の (1d) (＝タイプ*d*) からも、古英語の書き言葉が複雑な従属節を *þæt* 節内に収めることを苦手としていたのがわかる。ここでは、間接話法であることを再確認するように帰結節の前でもう一度 *þæt* を繰り返している。因みに、これは (1d)' のように、現代英語でも口語で時折見られる現象である。

いま、(1b) から (1d) まで、直接話法の名残のある、言い換えると口語的特徴を残した間接話法を見たが、(1e) (＝タイプ*e*) のように *þæt* 節内に *gif* 節、帰結節の順番に従属節が収まっている例も１例のみだが抽出された。

表１　古英語の間接話法に占める各タイプの比率

| | タイプ*b* | タイプ*c* | タイプ*d* | タイプ*e* | 合　計 |
|---|---|---|---|---|---|
| 比率（%） | 23 | 73 | 3 | 1 | 100 |

この2002年の調査では、従属節内が *gif* 節、帰結節の順となる古英語の間接話法において、タイプ*b*からタイプ*e*の占める比率は表１のとおりで、口語的特徴を残していると考えられるタイプ*b*からタイプ*d*までの比率が圧倒的に高く（99%)、現代英語の *that* 節の祖先となるタイプ*e*の比率は極めて低い（１%)。

以上、古英語においては書き言葉が未発達であるため、従属節が複雑な場合それを処理しきれずに、口語的な特徴を残したと思われる間接話法の例を観察してきた。これは、現代英語とはかけ離れた様相を呈するものであり、その後どのような過程を経て現代英語に見られる間接話法にまで発達したのか興味深い。そこで、今回の研究ではすぐ次に続く時代、初期中英語期において同様の構文がいかなる発展を見せるかを考察してみることにしたい。

なお、「古英語の書き言葉は未発達であった」と言う表現を幾度か用いたが、それをサポートするものとして、古英語が従位構造（subordination）を

苦手とし、等位構造（coordination）や並立（parataxis）に偏っていたと言う指摘がFischer（1992: 288), Blake（1977: 144-5), Gordon（1966: 29）にある。また、Mitichell（1985: 696）には、言語の歴史において、並立（parataxis）が従属（hypotaxis）に先行する旨の言及がある。

## 2 調　　査

### 2.1 調査方法

この調査のため、Appendix に挙げた初期中英語（12世紀中心、13世紀も含む）の12の作品を検索し、発話や認識・思考などを表す動詞の目的節となる従属節に *gif* 節を含む構文を全て抽出した[1]。Appendix の最初の６作品については、ミシガン大学の Corpus of Middle English Prose and Verse のウェブサイト上の検索機能を活用した[2]。残りの６作品はこのサイトには収録されていないもので、自ら読みながら手作業で用例を収集した。コーパスは散文か韻文の一方に統一するのが望ましいが、利用可能なテキストが限られているため、両者が混在している。いずれにしても、今回の研究テーマでは、両者の違いを発見できるに十分な用例を集めることは難しいかと思われる。また、中英語における統語法の方言差については Blake（1992: 14-5）や Mustanoja（1960: 41）に指摘があるように、音やつづり字に関する研究とは異なり、方言による統語法の違いを研究するには、方言を特定できる十分な分量のテキストが現存しないため、残念ながらそういった観点を取り入れることは今回の調査でも困難であった旨、付け加えておきたい。

### 2.2 調査結果

#### 2.2.1 構文のタイプ

今回の調査では、対象となる構文について次の７つのタイプが確認された。比較を容易にするために、古英語に関して確認したタイプと同じである場合、そのタイプのアルファベット記号をここに継承している。つまり、(2a) は直接話法。(2b) は間接話法のゼロ形。(2c) は *gif* 節が *þat* 節より前置されて

いるタイプ。(2d) は *þat* が繰り返されているもの。(2e) は *þat* 節内に *gif* 節、帰結節とも収まっているもの。(2f) は *þat* 節内に、帰結節、*gif* 節の順に収まっているタイプである。(2g) は帰結節、*gif* 節の順が (2f) と同じながら、接続詞 *þat* が抜けたものである。*a* から *f* までは古英語で既に確認したタイプであるが、最後の *g* は初期中英語で初めて抽出したタイプである。

(2) (a) and þus heo seiden heom bitwune; gif we hennen fareð þus. alle heo wulleð æfter us. (*Brut*, lines 2903-4 : 下線は筆者)
"and they said thus between the two of them, 'If we go from here like this, they will all be after us.'"

(b) ich weone gif hit weore; ilast seoue gere. / þa get heo weolden mare; þe þer-at weoren. (*Brut*, lines 12250-1)
"I reckon if it lasted seven years, then those who were there would still be wanting more."

(c) Louerd nu ic bidde þe gef þin wille is þet þu heom gefe rest la hwure þen sunne dei a þet cume domes-dei. (*Old English Homilies*, p.45)
"Lord, I now entreat thee, if it be thy pleasure, that thou give them rest at least on Sunday ever until doomsday come."

(d) Gudlac him sende word. bi ane wise monne; / þat if he him wold leoðien. of laðe his benden; / þat he wolde his mon beon. mid alle his mon-ueorde. (*Brut*, lines 2383-5)
"God lac had sent him word, through a wise man, that if he would ease him of his odious bonds, that then he would be his vassal with all his force of men."

(e) Efter his deaðe, he com ne niht ... & seide þet sikerliche gif he nefde iseid utterliche þet ilke þing þet he dude ine childhode, he were idemed among þe uorlorene. (*Ancren Riwle*, p.314)
"After his death, he came one night ... and said that if he had not

fully confessed that particular thing which he did in childhood, he should certainly have been among those who are lost."

(f) þenc þat arst þu eilest ðe seluen, gif ðu misþencst, oðder spekest oðder dest auht oðerliker ongeanes þin emcristen, þanne ðu woldest þat he dede ðe. (*Vices and Virtues*, p.133)

"think that first thou doest harm to thyself, if thou thinkest amiss, or speakest or doest anything in another way to thy fellow Christian, than as thou wouldst wish that he did to thee."

(g) he ueneð heo wule anon tobreke hire spusing, gef heo lokeþ oþer wiþ manne faire spekeþ. (The Owl and the Nightingale, lines 1554-6)

"they believe she is bound to break her marriage vows, if she looks at or praises some man."

### 2．2．2　構文別頻度と全体的傾向

表２に各タイプの用例数を作品別に示した。古英語の調査の際に比べて今回はコーパスの絶対量が少ないため、抽出できた用例数は十分であるとは言えない。それでも、テキストや抽出した用例を読みながら、古英語とは明らかに異なる傾向を窺い知ることができた。詳しい分析は後に行うが、初期中英語において注目すべき調査結果として、次の３点を最初に述べておく。

i．*gif*節のみが接続詞*þat*に先行する例（タイプ*c*）が古英語と比べ大きく減少した。

ii．逆にひとつの接続詞*þat*が*gif*節、帰結節の順に両者を導いている例（タイプ*e*）が古英語に比べ大幅に増えた。

iii．こういった変化に古英語から初期中英語にかけての語順の変化が関わっていると考えられる。

以下に、個々のタイプを分析しながら、こういった事実がどのような意味

を持つのか検討していくことにする。

表２　各タイプの作品別用例数

| | *a* | *b* | *c* | *d* | *e* | *f* | *g* | 合 計 |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| *Owl & N* | 1 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 2 |
| *Vices & V* | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 1 | 0 | 3 |
| *Brut* | 8 | 3 | 0 | 1 | 2 | 4 | 1 | 19 |
| *Jul.* | 2 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| *Sawles Warde* | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| *Hali Meidh* | 0 | 0 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 1 |
| *Bodley Hom.* | 8 | 0 | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 10 |
| *Holy Rood-Tree* | 3 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 0 | 4 |
| *Trinity Hom.* | 3 | 0 | 0 | 0 | 1 | 0 | 0 | 4 |
| *ChronE* | 0 | 0 | 0 | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 |
| *Ancren Riwle* | 2 | 0 | 0 | 0 | 2 | 2 | 0 | 6 |
| *OE Hom and Tr..* | 6 | 1 | 1 | 0 | 1 | 4 | 1 | 14 |
| 合　　計 | 33 | 4 | 1 | 4 | 8 | 15 | 3 | 68 |

## 3　分　　析

### 3.1　タイプ*a*

表２からわかるように、古英語の場合と同じく、初期中英語においても相対的に見て直接話法の頻度は高くなっている。また、現代英語に比べて直接話法を導く主節の動詞の種類が少ないのも古英語と同じで、今回現れたのは、*seide* とその異綴り形、*andswerede* とその異綴り形、*seiðe*、*cweðe*、そして珍しい例として *þenche* が１例あった。興味深いのは、古英語で直接話法を導くのはほとんど *cwæþ* であったのに対し[3]、この調査では *cweðe* は１例のみになっていることである。少なくとも調査対象としたタイプの直接話法では *said* と *quoth* の交代は、既に初期中英語期に起こっていたことが窺える。

これとは別に、本題に深くかかわるポイントとして、古英語との違いを見せるのは、引用部の帰結節の語順である。古英語においては必ずと言っていいほど *gif... þonne* の対をなし、*þonne*の後は VS と並んでいたのに対し、今回の調査では、帰結節には多くの場合 *þenne* などによる呼応がなく、(2a) や下の (3) のように SV の語順を示す（下線部)。このことの持つ意味については、下にタイプ *b*、*c*、*e* の分析を行う際に詳しく検討したい。

(3) Ne þenche ge herto. Gif þu me dest woh and wit beon anes lauerdes men; ic hit mene to mine lauerde alre erest <u>þu me scalt do riht</u>. and seodðan þe lauerde. (OE Homilies, p.33 : 下線は筆者)
"Think ye not hereto, 'If thou dost me wrong and we two be servants of one master, and I complain of it to my master, first of all thou shalt act rightly towards me, and afterwards towards the master'?"

## 3.2 タイプ*b*

上で古英語に関して述べたとおり、タイプ *b* は接続詞 *þat* を伴わないゼロ形の間接話法である。その理由は、元は直接話法であったものが、引用部分の複雑さのため、人称の変化、時制の一致などを経ただけで間接話法に再分析されたものと解釈した。中英語期のゼロ形については、中尾（1972: 369）では「14世紀はじめから頻繁となっていく」とあり、Fischer（1992: 313）では「*that* の省略は可能だが、中英語では古英語以上に制限されている」との記述があり、少なくとも初期中英語では少ないという見方がされている。しかし、今回の調査では４例であるが、間接話法全体の用例数から見ると高い比率でゼロ形が見つかっており、従属節が複雑な場合は初期中英語でも古英語と同じく例外的にゼロ形が用いられたものと考えられる。

ここで４例全てについて検討を加えていきたい。(4) と (5) は主節の動詞がそれぞれ *weone, wot* ということで思考・認識の動詞であり、これらは古英語でも間接話法のタイプ *b* の中心となる動詞である。また文脈から見ても

これら２例を直接話法と見做す積極的な理由はない。よって、これらの例文はタイプ *b* と見做した。残る (6)、(7) の例は、共通して主節の動詞が *seide* もしくは *seiden* で過去形であり、従属節の帰結節の動詞は仮定法になっている。その場合、従属節は間接話法と直接話法のどちらの可能性もある。しかし、ここでは文脈上、直接話法と見做す積極的な理由がないこと、また、そういったあいまいな構文が直接話法から間接話法への再分析を導いたと考えうることから、暫定的な面もあるが、(6)、(7) に見られるこのタイプを間接話法のゼロ形としてタイプ *b* に含めた。なお、(6) を間接話法と考えうる別の根拠として、主節と従属節で代名詞の人称の一致が起きている点を挙げておく。因みに、(4) ～ (7) すべて母国語話者による現代英語訳でも間接話法として訳されている。

(4)=(2b) ich weone gif hit weore; ilast seoue gere. / <u>þa get heo weolden mare</u>; þe þer-at weoren. (*Brut*, lines 12250-1 : 下線は筆者)

"I reckon if it lasted seven years, then those who were there would still be wanting more."

(5) ac god wot genoh geare gif ge of þan treowe æteð, þanne beoð giure eagen geopened. (*OE Hom.* p.223)

"but God knows well enough if ye eat of the tree then shall your eyes be opened."

(6) heo seiden him mid rede; & mid stilliche runen. gif he were swa þriste; & he hit don durste. þat he heom wolde leaden; out of þane leoden. out of þeowedome; freo þat heo weoren. <u>heo hine wolden maken duc; & deme ofer his folke</u>. (*Brut*, lines 180-4 : 下線は筆者)

"they said to him, as wise advice, and with secret whispers, that if he were so daring as to hazard acting, and would then convey them out of that same country, out of slavery, so that they would be free, then they would appoint him duke, and director of the people."

(7) he seide gif mon funde; in auer æi londe. æuer æi cniht bærn; þe næuere fæder no ibæd. & openede his breoste; & nomen of his blode. & mengde wið þan l((i))me; & þæne wal læide. <u>þenne mihte he stonde; to þere worlde longe</u>. (Brut, lines 7748-52 : 下線は筆者)

"He said if any one found in whatever land, any little boy who had never had a father, and opened his breast and took some of his blood, and mixed it with the lime, and laid the wall with that, then would it stand for all the world long."

セクション３．１において、直接話法の引用部の帰結節の語順について、初期中英語では *penne* などによる呼応がなく、SV の語順を取るものが増えた旨を述べたが、注目すべきことに間接話法のタイプ *b* の帰結節でも同じ様にSVの語順を取る例が観察できる。(4)、(6) がその例である。特に (4) では副詞句が帰結節の先頭にあるにもかかわらず SV の語順を取っている。これも初期中英語の直接話法で観察される現象である。つまり、ゼロ形における従属節の語順の変化が、主節である直接話法の引用部の語順変化を写すかのように対応していることになる。そしてこれは、ゼロ形は元は直接話法であったものが、人称の変化、時制の一致などで間接話法に再分析されたものとする仮説をサポートするひとつの証拠になるものと考えられる。ちなみに、(5)、(7) のように *gif*... *penne* の呼応を見せる例もまだあるが、これもまた、初期中英語の直接話法になお見られる語順である。

### ３．３　タイプ *c*、*d*、*e*

議論の進行上、このセクションではタイプ *c*、*d*、*e* を同時に扱う。タイプ *c* では帰結節のみが *þat* 節内に収まり、*gif* 節はその前、いわば欄外に押し出された格好になっている。古英語の調査では、このタイプは頻度が圧倒的に高く、*gif* 節を伴う間接話法の標準と言える構文であった。ところが、初期中英語ではその数が激減している。反対に数が大幅に増えたのが *þat* 節内に

*gif*節も帰結節も収めてしまうタイプ*e*である。古英語の調査の際、古英語の散文が未発達であったため、複雑な従属節を処理しきれずに*gif*節を*þæt*節の外に出してしまったとする分析を行ったが、初期中英語を境にそういった問題が解決され、*þat*節内に*gif*節も帰結節も両方とも収められるようになったということになる。これは大変大きな変革で、非常に重要なポイントである。

ではなぜ、初期中英語ではタイプ*c*に変わりタイプ*e*が勢いを伸ばすようになったのか。セクション３．１では、直接話法の引用部における帰結節の語順がVSからSVへ変化したケースが増えたことを観察した。続いて、セクション３．２では、その語順の変化がタイプ*b*のゼロ形の従属節において反映されていることを見た。そしてこのセクションで問題にしているタイプ*c*からタイプ*e*への推移もまた、初期中英語期に、直接話法の帰結節における語順がVSからSVへ変化したことと深い関係があると考えうるのである。

古英語では、直接話法において帰結節はすべて*ðonne* VSという形を取っていた。そしてこれを間接話法の従属節とするためには、*þæt*を帰結節の文頭に埋め込み強制的に語順を*þæt* SVとする方法が取られていた。(1c)がその例にあたる。語順をSVに変換させるためには、どうしても帰結節の文頭に*þæt*を置く必要があり、*gif*節の前ではその効果がなく、間接話法として十分な標識に成り得なかったものと思われる[4]。繰り返しになるが、古英語のタイプ*c*では*gif*節のほうは*þæt*節内に収まることはなかったものの、帰結節のみが*þæt* SVとなることにより間接話法としての標識となったと考えられる。ところが初期中英語では帰結節の語順が多くの場合既にSVとなっており、帰結節の文頭に*þat*を置いて語順を強制的に*þat* SVに変えるという必要がなくなった。それに伴って*þat*を*gif*節の前に置く余裕が生まれた。あるいは見方を変えれば、既に帰結節の語順がSVとなっているのでその前に*þat*を置いただけでは間接話法としての十分な標識となり得なくなり、帰結節の前にわざわざ*þat*を置く意味がなくなった。それに伴って*þat*は*gif*節の前へと移動していき、新しい間接話法の構文、つまりタイプ*e*が生まれ

たと推論できる。因みに、この調査で抽出したタイプ *e* の８例のうち７例までが帰結節に SV の語順を持つ。次の (8) は例外の１例である。

(8) Nu suggeð mine wise; and mine witie men. þat gif ich mine þi blod; ut of þire breoste; & minne wal wurche; & do to mine lime. þenne mai he stonde; to þere worlde longe. (*Brut*, lines 7900-3)
"Now my wise men and my wizards are all of them saying that if I take your blood out of your breast for making my wall, and mix it in with my lime, then it will stand all the world long."

この例では、*þat* が *gif* 節、帰結節の両方に先行しているにもかかわらず、帰結節が *ðenne* VS となっている。しかし、Warner (1982: 161-2) の統計によると、中英語では、*seie* を主節動詞とした場合、*þat* に導かれていても直接話法である場合が少数見られ、この例も、*þat* 以下が直接話法とは言わないまでも、直接話法的特徴が現れたものと解釈できる。現代英語でも、次の (9) のように *that* を伴う節において、直接話法が用いられるのは時折見られる現象である。

(8) Lindsay Brooke, an analyst at CSM, says every big car company has to be thinking that "if the Japanese kick-start this thing, you've got to have this technology on the shelf."
(*Newsweek*, September 6 / September 13, 2004)

なお、残るタイプ *d* (＝ (2d)) については既に述べたように、間接話法であることを合図するために接続詞 *þat* を *gif* 節の前だけでなく帰結節の前にも付加したものである。このタイプは現代英語でも口語で時折観察できることから、初期中英語の書き言葉が口語的性質を残していた現れと見ることができる。また、このタイプは、タイプ *c* とタイプ *e* の両方の特徴を備えてい

る点、及び、古英語に比べ全体に占める比率が増している点から見て、タイプ*c*からタイプ*e*への推移に際しての中間地点であったとも考えることができる。

### 3.4 タイプ*f*、*g*

議論の進行上、タイプ*f*と*g*を同時に扱う。これまでのタイプとは異なり、このふたつのタイプでは従属節内が帰結節、*gif*節の順になっている。*gif*節が主節の動詞と帰結節の間に来ることによるぎこちなさがないため、タイプ*f*のように接続詞*þat*を伴うものが圧倒的に多くなっている。タイプ*f*は、古英語でも、用例数が多く、古英語期、中英語期を通じて、*gif*節を伴った間接話法の代表となるタイプのひとつである。もちろん現代英語にもそのままの形で引き継がれている。タイプ*g*はタイプ*f*から*þat*がとれたもので、古英語を調査した際には観察されなかったが、今回は3例見つかった。しかし、同じゼロ形でも、タイプ*b*に比べると*þat*を伴うタイプに対する比率は低く、タイプ*b*に課せられたようなゼロ形となる必然性がなかったことが窺える。

## 4 まとめ

以上、初期中英語における*gif*節付きの間接話法の発達を見てきたが、そのキーワードは語順と言える。まず、直接話法のタイプ*a*において、帰結節の語順が古英語のVSから初期中英語ではSVへと変化した点に着目した。そして、タイプ*b*では、帰結節の語順がやはり、古英語のVSから初期中英語ではSVへと変化し、直接話法の変化をそのまま反映していた。これは、タイプ*b*が直接話法に由来するものである証左と考えられる。次に、初期中英語になって、*gif*節のみが接続詞*þat*に先行するタイプ*c*が大幅に減少し、逆に*gif*節、帰結節の両方が接続詞*þat*に導かれるタイプ*e*が増加した理由を、やはり直接話法の帰結節の語順がVSからSVへと変化したことに求めた。古英語においては、*þæt*が帰結節の先頭に来ることによってその語順を

強制的に VS から SV へと変化させ間接話法としたのに対して、初期中英語では初めから帰結節の語順が SV であるのでそのような強制の意味がなくなり、*þat* が *gif* 節の前にくることになったと推論した。このように考えると、古英語において、帰結節の前に *þæt* が来るタイプ *c* が多く見られた理由は、古英語が複雑な従属節を処理しきれなかったというだけではなく、語順上の必然性もあったということになる。

以上、初期中英語において従属節に *gif* 節を伴う場合、間接話法がゼロ形、*þat* 形とそれぞれ別々の道筋を経ながらも、直接話法の語順に影響を受けて発達する様子を考察した。今回は *gif* 節を用いた調査を行ったが、他の副詞節であっても同様の過程を経たものであると考えられる。また、ゼロ形については、従属節が副詞節などを伴わない単文の場合も、直接話法からの再分析によって生じえたと思われる。その意味で、今回の *gif* 節を伴った間接話法の調査は、ゼロ形の発達を解明する窓にもなると言えるかも知れない。

* この論文は日本中世英語英文学会　第20回記念全国大会（2004年12月11日　於：武庫川女子大学中央キャンパス）における口頭発表に加筆・修正を行ったものである。

## 注

1　(2d) のみ sende word を伝達を表す動詞句とみなし、例外的に用例として加えた。

2　アドレスは http://www.hti.umich.edu/c/cme/。コーパスの検索にあたっては、*gif* をキーワードとして、それを含む全ての文を抽出した後、対象となる文のみを手作業で絞り込んだ。なお、検索においては *gif* のみならず *if*、*yf*、*gif*、*gyf*、*gef*、*gief*、*geif*、*ef*、*yef*、*yuf* などの異綴りにも注意を払った。本文中では *gif* を代表として用いる。

3　この点については Otsu (2002: 230) 及び Ogura (1979: 5) を参照。

4　この点については、古英語で調査した限りでは、古英語において *þæt* が *gif* 節の前に来ている例が (1e) の 1 例のみで、用例数が少なく確定的なことは言えないが、(1e) では帰結節が SV の語順ではなく、副詞－動詞の順になっている点、つまり、帰結節において VS から SV への変換が起きていないことに注目されたい。

## References

Allen, R., trans. 1992. *Lawman*. London: J. M. Dent.

Blake, N. 1977. *The English Language in Medieval Literature*. London: J. M. Dent & Sons Ltd.

Blake, N., ed. 1992. *The Cambridge History of the English Language*, Vol. II. Cambridge: Cambridge University Press.

Brook, G. L. 1958. *A History of the English Language*. London: Andre Deutsch.

*Complete Corpus of Old English*. Toronto: Toronto University.

Cook, T. 1996. *Breakheart Hill*. New York: Bantam Books.

Denison, D. 1998. "Syntax." In Romaine, S. ed. *The Cambridge History of the English Language*, Vol. IV. Cambridge: Cambridge University Press. 92-329.

Finegan, E. & D. Biber. 1995. "*That* and Zero Complementisers in Late Modern English: Exploring ARCHER from 1650-1990." In B. Aarts & C. Meyer eds., *The Verb in Contemporary English*. Cambridge: Cambridge University Press. 241-57.

Fischer, O. 1992. "Syntax." In Blake, N. ed. *The Cambridge History of the English Language*, Vol. II. Cambridge: Cambridge University Press. 207-408.

Gordon, Ian A. 1966. *The Movement of English Prose*. Harlow: Longman.

Gorrell, J. Hendren 1895. "Indirect Discourse in Anglo-Saxon." *PMLA* 10: 342-485.

Hopper, Paul J. 1992. "A Discourse Perspective in Syntactic Change: Text-building Strategies in Early Germanic." In Polemé, E. & W. Winter eds., *Reconstructing Languages and Cultures*. Berlin: Mouton de Gruyter. 217-37.

Hopper, Paul J & E. C. Traugott. 1993. *Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.

Iyeiri, Yoko. 2003. "Review of *Old English Constructions with Multiple Predicates*, by Masayuki Ohkado." *Studies in Medieval English Language and Literature* 18, 21-29.

Jespersen, O. 1949. *A Modern English Grammar On Historical Principles*. Part III. London: George Allen & Unwin Ltd.

Kiparsky, P. 1995. "Indo-European Origins of Germanic Syntax." In Battye, A. & I. Roberts eds., *Clause Structure and Language Change*. Oxford: Oxford University Press. 1995, 140-69.

Manabe, K. 1979. *Syntax and Style in Early English*. Tokyo: Kaibunsha Ltd.

Mitchell, B. 1985. *Old English Syntax*, Vols. I and II. Oxford: Oxford University Press.

Mustanoja, Tauno F. 1960. *A Middle English Syntax*. Part I. Helsinki: Société Néophilologique.

Nakao, T. 1972. *Eigoshi* II. Tokyo: Taishukan Shoten.

*Newsweek*. September 6 / September 13, 2004: 56.

Ogura, M. 1979. "*Cweðan and Secgan* in Old English Prose." *Bunken Ronshyu* 4. Senshyu University: 1-30.

Ohkado, Masayuki. 2001. *Old English Constructions with Multiple Predicates*. Tokyo: Hituzi Shobo.

Otsu, N. 1993. "On the Variation between *That* and Zero Connective as Object Clause Links in Modern British English." *Ronshu* 9 (Osaka University of Foreign Studies): 41-50.

Otsu, N. 1994. "On the Omission of the Conjunctive *That*, with Special Reference to Verbs Which Are Usually Considered to Require Its Presence." *Eibeikenkyu* 19 (Osaka University of Foreign Studies): 247-60.

Otsu, N. 1995. "On the Omission of the Conjunction *That* in Clauses Introduced by Adjectives." *English Corpus Studies* 2: 27-43.

Otsu, N. 1996. "On the Omission of the Conjunctive *That* in Clauses in Apposition to Nouns - Searching the Bank of English on the Internet CobuildDirect." *Eibeikenkyu* 21 (Osaka University of Foreign Studies): 71-85.

Otsu, N. 1999. "On the Absence of the Conjunction *That* in Late Middle English." *JELS* 16. *Papers from the Sixteenth National Conference of The Linguistic Society of Japan*: 191-200.

Otsu, N. 2002a. "On the Absence of the Conjunction *that* in Late Middle English." In T. Saito, J. Nakamura & S. Yamazaki eds., *English Corpus Linguistics in Japan*. Amsterdam: Rodopi: 225-34.

Otsu, N. 2002b. "On the Presence or Absence of the Conjunction *Þæt* in Old English, with Special Reference to Dependent Sentences Containing a *Gif*-clause." *English Language and Linguistics* 6.2: 225-38.

Rissanen, M. 1991. "On the History of *That* / Zero as Object Clause Links in English." In Aijimer, K. & B. Altenberg eds., *English Corpus Linguistics*. London: Longman. 272-89.

Thompson, Sandra A. & Anthony Mulac 1991a. "A Quantitative Perspective on the Grammaticization of Epistemic Parentheticals in English." In Traugott, E. C. & B. Heine eds., *Approaches to Grammaticalization*, Vol. II. Amsterdam: John Benjamins. 313-29.

Thompson, Sandra A. & Anthony Mulac 1991b. "The Discourse Conditions for the Use

of the Complementizer *That* in Conversational English." *Journal of Pragmatics* 15: 237-51.

Traugott, E.C. 1989. "On the Rise of Epistemic Meanings in English: An Example of Subjectification in Semantic Change." *Language* 65: 31-35.

Visser, F. Th. 1966. *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. II. Leiden: E. J. Brill.

Walker, M. W. 1996. *Under the Beetle's* Cellar. New York: Crimeline

Warner, A. 1982. *Complementation in Middle English and the Methodology of Historical Syntax*. London: Croom Helm.

## Appendix

*The Owl and the Nightingale* (edited by J.W.H. Atkins, Cambridge, 1922)

*Vices and Virtues* (Early English Text Society. Original Series: 89)

*Layamon's Brut* (Early English Text Society: no. 250)

*Te Liflade of St. Juliana* (Early English Text Society. Original Series: 51)

*Sawles Warde* (Leeds School of English Language Texts and Monographs; no. 3)

*Hali Meidenhad* (Early English Text Society. Original Series: 18: 1866, rev. 1922 (for 1920))

*Twelfth-Century Homilies in MS. Bodley 343*, Part I (Early English Text Society. Original Series: 137, pp.1-101)

*History of the Holy Rood-tree, A Twelfth Century Version of the Cross-Legend* (Early English Text Society. Original Series: 103, .pp.1-35)

*Old English Homilies of the Twelfth Century, from the Unique MS. B. 14. 52 in the Library of Trinity College, Cambridge* (Early English Text Society. Original Series: 53, pp.1-201)

*Two of the Saxon Chronicles Parallel*, 2 vols. (Oxford: ChronE の1122年から1154年まで)

*Ancren Riwle* (Camden Society no. LVII)

*Old English Homilies and Homiletic Treatises of the Twelfth and Thirteenth Centuries* (Early English Text Society. Original Series: 29, pp.2-53, pp.72-159, pp.204-287)